

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520756

研究課題名（和文）イギリス開発政策との相互展開からみるアフリカの脱植民地化と経済発展の史的研究

研究課題名（英文）Decolonization and Economic Growth in Africa: An Interactive Role of the British Aid Policy after the World War II

研究代表者

前川 一郎 (MAEKAWA ICHIRO)

創価大学・文学部人間学科・教授

研究者番号：10401431

研究成果の概要（和文）：本研究は、植民地経済を変革し、国民の富の増大を目指した独立期アフリカ諸国が掲げた開発主義の課題が、じつにこの半世紀の間ほとんど実現しなかったとの認識に立ち、その歴史的背景を検証する試みである。総じていえば、アフリカの旧英領諸国が独立に際して直面した喫緊の課題とは、旧宗主国イギリスの開発政策を受け入れ、経済発展に資する政策を早急に具現化することにあつたといえる。本研究では、その苦闘に満ちた歩みを具体的に明らかにするなかで、アフリカの脱植民地化と経済発展の史的特質を考察した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to examine an interactive role of the British aid policy in the heady days of independence in Africa. Based on official documents in the 1960s and the 1970s it casts a new light on the perspective of the British aid policy and Britain's external relations with Africa: Britain did not push for neo-colonial relations with (ex) colonies in Africa but eager to discard her ties to sluggish economies. For Africa, it meant that the continent was eliminated from the economic interest of developed countries, and thus, forced to have a tenuous relationship with the center of the international economy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、ヨーロッパ史・アメリカ史

キーワード：イギリス、アフリカ、開発援助、脱植民地化、経済発展

### 1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦後のアフリカにおける経済開発の歴史は、大きく二つの領域から検討されてきた。第一に、I・ウォーラーSTEINやR・ロビンソン等にみられるように、独立は国際経済に対する植民地主義的従属関係を変えなかったと、独立国の経済的従

属状態を主張する見解がある。これらの研究は、対アフリカ特恵貿易を約束したヤワダ協定の意義に加えて、戦後のヨーロッパ諸国が積極的に進めた「第二次アフリカ争奪戦」といわれるアフリカ開発戦略において、投下された資金の大部分が第一次産品輸出の促進を意図していた点を強調して

いる。いふなれば、独立期のアフリカ経済開発に初期条件として付与された、植民地経済の桎梏が明らかにされている。こうした植民地経済からの脱却を目指して、アフリカ諸国が採択した二つの開発主義路線についても、R・ベイトやP・コリアーをはじめとする開発経済学や政治経済学の領域において膨大な研究蓄積がある。そこで示唆されているのは、パイの公平な配分を目指した「アフリカ社会主義」型の開発主義と、経済の効率性を重視してパイそのものを拡大しようとした成長志向の親欧米型開発主義とが、農業促進にせよ工業化政策にせよ、いずれも計画途中で挫折を余儀なくされたという事実である。その理由については、パン・アフリカニズムの苦闘と共にアフリカ国家運営の困難が指摘されることもあるが、近年では、欧米のコミットメントや1970年代以降アフリカ開発に全面的に関与する世銀やIMFの国際的影響力の内容に、より大きな関心が寄せられている。

要するに、これらの学術的背景から言えるのは、アフリカの経済発展は、いずれにしてもアフリカが国際政治経済に段階的に統合されるという、アフリカ現代史を貫く大きなテーマのなかで展開し、そして苦闘を余儀なくされた、という点である。研究代表者は、これまでの研究や共同研究での研鑽を通して、過酷な自然や土地豊富・労働希少といった要素賦存と、植民地主義が刻印した内外の諸関係が、初期条件として独立期アフリカの開発主義の継続性を阻害したとの知見を得ていた。他方、「東アジアの奇跡」を実現したアジアの独立国が、垂直的な冷戦秩序の下で相互補完的 *complementary* な経済関係を享受し得た側面（外需か内需かという定式のみならず、成長志向型開発主義への国民的支持、それを促す政府の統制力、地域経済間の「雁行的発展」、それらの成長戦略を担保した「強制された自由貿易」の重要性等）に着目し、アフリカではそうした国際政治経済との相互作用がうまく機能しなかった、との考えを得た。とりわけ独立当初のアフリカ諸国においては、研究史が指摘する特惠貿易やスターリング圏といった植民地経済のマクロな所与条件の変革というよりは、旧宗主国が提供する開発援助パッケージをいかに受容し、政策に具現化するかというミクロな取り組みこそが、困難であるが現実的で、何より喫緊の課題だった。こうした問題関心と研究履歴に基づき、研究代表者は、独立期アフリカの経済発展の歩みを、旧宗主国の開発政策との相互展開に着目し、その実態を検証する必要があるとの着想を得て、本研究を開始した。

## 2. 研究の目的

本研究は、独立期アフリカの開発主義を、イギリス開発政策の受容と困難を伴う具現化の経緯に着目して検討し、アジアの発展との比較史的観点を加味しながら、アフリカの脱植民地化と経済成長の史的特質を明らかにする試みである。具体的には、アフリカにおけるイギリス植民地支配の拠点の一つであった東アフリカを取り上げる。そのうえで、以下の三点に沿って研究を進める。

(1) 第1に、先行研究の整理をふまえたうえで、分析対象の国際的背景をなすイギリス開発政策の具体的展開について、イギリス側の史料を中心に検討する。

(2) それをふまえて第2に、これを受容した東アフリカ（ケニア、タンザニア、ウガンダ）の国内政治経済に分析の軸足を移し、その開発主義政策の実態について、東アフリカ側の史料を中心に検討する。

(3) 第3に、それらの分析を総合的に考察し、アジアの開発主義との比較史的考察を加えたうえで、アフリカ独立の歴史的意義について一定の見解を示す。

## 3. 研究の方法

(1) 先行研究のサーヴェイとイギリス開発政策についての実証研究

### ①本研究全体にかかわる基礎研究の整理

イギリス側と東アフリカ側の双方の研究蓄積を広く再検討することによって、本研究全体にかかわる研究動向について多角的に概観し、本研究を支える学術的基礎を強固にする。

### ②イギリス開発政策についての実証研究

主にロンドンのナショナル・アーカイヴスが所蔵するイギリス政府関連公文書を中心に検討する。戦後イギリスの開発援助政策を史料に即して跡付ける。

(2) イギリス開発政策を受容した東アフリカの開発主義についての実証研究

### ①教育等を通じた人的資源開発が成長戦略にいかに関与したのか

人的資源開発を農業や製造業の技術普及といった成長戦略に結びつける政策パッケージの不在は、近年の開発経済学がアフリカの低成長の要因の一つとして重視した問題である。本研究では、独立期の東アフリカ各国政府が、どういう経緯で人的資源開発を含んだイギリスの開発援助パッケージを受け入れ、いかなる政策を講じてこれを具現化しようとしたのか、例えば1967年に地域経済関係の確立を目指して創設された東アフリカ共同体の役割等を手掛かりに明らかにする。

### ②要素賦存や植民地主義的初期条件がいかに影響を及ぼしたのか

この点については開発経済学の重厚な研究蓄積があるが、それらは大胆な経済学的仮

説を精緻な数式で論証するあまり、ときに現実からかけ離れた歴史像を提示するきらいがある。そうした傾向を批判した経済史家 G・オースティンの研究などに学びながら、開発政策への影響を東アフリカの事例に即して検討する。

### ③イギリス開発援助政策の下で公共財をいかに整備拡充し得たのか

開発政策における公共財（植民地の歴史を背景に独立当初は、便益の波及が複数の国に及ぶ国際公共財としての性格が強かった）の意義については、重要性が指摘されながらあまり検討されていないのが現状である。特にイギリス開発政策において一定の意義を認められた衛生、水路や交通路、灌漑システム等の整備拡充事業は、（政治的配慮に基づき）特定の集団のみが享受し得る分割可能な資源供与であったのか否か、公共財としての真価が問われていた。その実態について具体的に検討する。

## 4. 研究成果

本研究の目的は、植民地経済を変革し、国民の富の増大を目指した独立期アフリカ諸国が掲げた開発主義の課題が、この半世紀の間ほとんど実現しなかったとの認識に立ち、その歴史的背景を検証することにあつた。

この研究課題を進めるにあたって、先行研究の整理を踏まえたうえで、分析対象の国際的背景をなすイギリスの開発政策の具体的展開について、イギリス側の資料を中心に検討した。先行研究としては、(1) イギリス帝国史、特に経済史、(2) 国際関係論、特に崩壊国家論、(3) アフリカ経済史、(4) 開発経済学等々の分野を中心に整理を試み、本研究全体に関わる研究動向についての概観を得ることができた。そのうえで、イギリス側が戦後どのようにして（旧）植民地・開発途上国に対して開発援助政策を展開してきたかについて、国立公文書館 TNA 所蔵文書を中心に調査・考察した結果、特に脱植民地化が本格化する 1960 年代を一つの転換点として、戦後の「植民地開発政策」が終わり、ポストコロニアル世界に対応した新しい戦略（金融業務に重点をおいた）が打ち出されていく経緯を跡づけることができた。

こうした成果は、「5. 主な発表論文等」に記した論文や講演、学会発表を通して発表してきた。例えば、「イギリス対外援助と帝国の解体」(『ヨーロッパ文化研究』第 13 巻、2012 年、89-129 頁) では、第二次世界大戦後のイギリス開発援助政策の経緯を時系列的にまとめたものであり、イギリス開発援助政策の概観を得る研究として位置づけられる。もっとも、本稿は基本的にイギリス開発援助政策が戦後どのように行われてきたのか、その経緯を概観する党、どちらかといえ

ば静態観察に基づくものであり、事象の原因結果を史料に基づき跡付けるところまでは至っておらず、それらは今後の課題として残されている。

他方、実際に独立期アフリカにおいてイギリスの援助がどのように開発に結びついたのか（あるいは結びつかなかったのか）という点については、近刊に章分担執筆した業績等で発表予定である。また、イギリスの援助政策が 1960 年代後半以降退潮傾向に陥り、独立期アフリカの開発政策にほとんど資することがなかった経緯についての考察は、近刊の「アフリカからの撤退—イギリス開発援助政策の顛末」(『国際政治』第 173 号、2013 年 6 月刊行予定) で発表予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

①前川一郎「イギリス対外援助政策と帝国の解体」『ヨーロッパ文化史研究』第 13 号(2012)、290-304 頁、査読有。

②前川一郎「アフリカからの撤退—イギリス開発援助政策の顛末」『国際政治』第 173 号「戦後イギリス外交の多元重層化」(2013 年刊行予定)、査読有。

③前川一郎「独立期アフリカにおける地域経済関係—東アフリカ共同体の経験」秋田茂編『「長い 18 世紀」から「経済的再興」へ—アジアからのグローバルヒストリー』ミネルヴァ書房(2013 年刊行予定)、査読有。

④前川一郎「アフリカン・コモンウェルスの台頭—1969 年アルーシャ協定を中心に」山本正・細川道久編『コモンウェルス—ポスト帝国のソフトパワー』(ミネルヴァ書房、2013 年刊行予定)、査読有。

〔学会発表〕(計 4 件)

①前川一郎「イギリス援助と帝国の解体—グローバルヒストリーの観点から」東北学院大学ヨーロッパ文化研究所公開講演会、2010 年 11 月、東北学院大学。

②Maekawa, Ichiro. 'British Aid and Decolonization'. Epstein Memorial Lecture, Mar. 2011. London School of Economics and Political Science. U.K.

③前川一郎「アフリカの脱植民地化と経済成長過程」イギリス史研究会、2011 年 6 月、青山学院大学。

④Maekawa, Ichiro. 'Neo-colonialism reconsidered: a case study of East Africa in 1960s - 70s'. Imperial and World History Seminar, Dec. 2012. Institute of Historical Research, University of London. U.K.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前川 一郎 (MAEKAWA ICHIRO)

創価大学・文学部・教授

研究者番号：10401431